

唐津街道と長崎街道・脇街道略図

『唐津街道』河島悦子著より



畦町宿の歴史

畦町河原の合戦

ぎやらしい畦 主人 岩熊 寛

一、唐津街道の道筋

唐津街道は、赤間宿から唐津までは赤間―畦町―青柳―箱崎―博多―福岡―姪浜―今宿―前原―深江―浜崎―唐津と十二宿を経由する一筋の街道であるが、赤間宿に致るには海側の大里―小倉―戸畑―(洞海湾船)―若松―芦屋―赤間を経由する六宿の道筋と、内陸の木屋瀬―植木―赤間の三宿を経由する道筋とがあった。参勤交代の折はこの街道を黒田藩・唐津藩が、そして文政元年(二八一三)以降博多からだが、加えて島津藩が使用した。

二、畦町宿の成立

寛永十九年(一六四二)二代藩主黒田忠之は、青柳宿から赤間宿までが四里と長いので、お昼の休息宿と

して中間の青柳より二里・赤間より二里の畦町に宿場を設けた。藩主が休息したのは八尋庄屋宅で、時折護念寺をも使用した。従った幹部の武士が休息する陣屋は、庄屋宅から数軒下手であった。

「畦町宿」となる以前の畦町は「本郷畦町」と呼ばれる本郷の枝村で、戸数数千軒。十二世紀末の「米一丸」事件(後詳述)によって建てられた「観地山地蔵堂」の場所と本郷への往来道から、枝村の人々の居住地は畦町宿の西構口辺りではないかと考えられる。

黒田藩は「畦町宿」を上ノ番(上町九九間)／中ノ番(中町七二間)／下ノ番(六三三間)下町(七〇間)(現在は合わせて下町)、総間数三〇三間(約五七〇段)とし、通りを挟んで左右五十軒余、合計百軒余の居住地を作った。いわば「新興団地」である。枝村の十数軒に加える八割強の新「村人」は、約一キ程離れた鳥の巣村住人が移住させられた。奨励金は出されたが、現在の「鳥の巣」が畦町よりも温暖な事と、父祖伝来の居住地からの集団移住という事を考え合わせると、封建時代故実現し

た半強制移住だったと考えられる。

『宗像郡明細帳』に寛政年間（二七八九〜一八〇〇）の宿の戸数と人口構成を見ると一一〇軒・総人口四八二人。（大工七人・質屋七人・桶屋七人・紺屋二人・酒造屋二人・盲僧二人・出家一人・麴屋一人・木挽四人）で商家は合わせて七九人となっている。これが幕末に近い弘化三年（一八四六）になると一六〇軒・五七八人へと増加している。今日畦町区の総戸数と人口は二六七戸七七五人だが、旧畦町宿に限っては九四戸・二八九人。江戸時代同様道を挟んで左右ほぼ同数の人家が並んでいるが人口は半減している。

三、畦町（畝町・疇町）の地名

『角川地名大辞典』には「畝町とも書いた。西郷川上流域に位置する。許斐山南麓に広がる丘陵地。地名の由来は、畦の多い田が広がる宿場町であったことによるという（『福岡町史』）。奈良期の寺院跡（*正しくは駅舎跡）があり、平瓦・丸瓦・軒先瓦が出る。」とし、更に「中世畝町」として「戦国期に見える地名」とし

て「新撰宗像記考證」（『宗像郡誌』）

の感状を紹介する。宗像氏貞の「感状」は三通あるが『福岡町史』資料編からその一つを紹介。去七月八日多賀美作守隆忠、至院内発向之時、於畝町河原、遂防戦之刻、太刀打高名、殊被疵左肩、剩被討果隆忠粉骨之次第、忠節絶比類、感悦之至也、弥可被拔抽忠貞事、肝要候、恐々謹言／弘治三年十一月六日氏貞／占部右馬助殿／此感書千葉与兵衛所持す傍線部の如く「畝町」と表記されている。「畝」は「畑のうね」の意であって「畦」又「疇」も同意のため江戸時代までは「畦町・畝町・疇町」が「あぜまち」の表記に使用されている。

四、畦町河原の合戦とその遺跡・伝承

「感状」の「畦町河原の合戦」は弘治三年（一五五七）七月八日のことであった。旧暦は凡そ四十日程を加えると現在の暦になるから九月中旬、稲の取り入れに多忙の時期ではある。当時世は戦国時代、宗像郡を領していた宗像氏貞（宗像家八十年代、

最後の当主）は大内家の覇権を継ぐ毛利元就の勢力下にあった。本木郷畦町に関して言えば、宗像氏の拠点には許斐山に構えた許斐山城（高宮山はその出城）、この城を攻め落とさんと多賀美作守隆忠の軍勢が進軍して来たのである。

多賀美作守隆忠は元来大内氏の家臣で、筑前の大内領の検断職（司法長官）として派遣され大宰府に在任したが、大内義隆滅亡後は大友宗麟方に降って、大友方が許斐山城を奪った時期は一時その主も務めた武将で、天文二十四年（一五五五）の七月には宗像氏の武将占部尚持（前出感状の主）に夜襲をかけられて敗北、城を逃れた経緯がある。さて、合戦の模様を「宗像記第八多賀隆忠合戦付許斐氏任謀叛之事」に見てみよう。

弘治三年、多賀美作守隆忠は、大内殿滅亡の後大友に降参す。斯て隆忠大勢を率し、立花に出張し、許斐の城をせめんとす。占部右馬助尚持（*尚持）、此由を聞て、何條隆忠か大友に降参して、忠節がほに此城を

攻んといふこそ奇怪なれ。よせ付ては無念なりと、七月八日本木の郷に出張して、合戦數刻に及ぶといへども、勝負更に決しがたき處に、占部尚安（*尚持の父）二百計にて、横合に馬を入る。隆忠不怵一度にとつと崩れて、右往左往に敗北す。味方機に乗りて、追詰追詰討つ、隆忠は畝町の川端にて、取つてかへし戦ひけれ共、大勢に取こめられて討れにけり。多賀彦四郎も返し合せ、勇を振ふといへ共、終に討れて失せにけり。―後略

占部尚持と多賀美作守隆忠、遺恨の戦である。寄せてくる隆忠軍に対し、尚持軍は許斐山城を出て迎え討つ戦となり、傍線部①の如く「本木の郷」での「合戦數刻」（凡そ半日）。「立花」の勢力圏から許斐山に致る経路は唐津街道の道筋と重なって飯盛山―内殿―畦町―許斐山。但し弘治三年当時は畦町は「本木郷畦町」で道の周辺に人家はほとんど無いから、半日に及んでの合戦は「本木郷畦町」に於いてと考えてよい。



山斐許上手原河町哇

去七月八日多賀美作守隆忠、至院内発向之時、当郡之内於畝町河原、遂防戦、隆忠討果之刻、郎従安部忠左衛門被疵切疵左手指僕従弥三朗被疵鎧疵首殊塩屋神六討死、并僕従清左隆忠鏹合討死、不敏誠神妙感悦之至也、弥可拔抽忠節候之状如件／弘治三年十一月六日 氏貞／吉田彈正忠殿／此感状今宗像郡池田村吉田氏小助家にあり

討ち死にした多賀美作守隆忠は高宮山に、部下の侍は近辺に葬られた。



隆忠の墓と筆者

することが出来た。榊を供えたと思われる小さな竹筒が二本墓前に立てられてはいたが、墓には幾本か枯れた木と竹が倒れかかり、散り敷いた木の葉の中にあつた。高さ1畝程、土に埋もれた下部の幅も1畝程の自然石で、確かめたが戒名その他刻された文字はない。古老の話では「隆忠が高宮山の出城を守っていたからここに墓を作った」ということで

双方譲らぬ戦況だったが、傍線部②によって占部側勝利となる。尚安は尚持の親であれば最強の援軍。恐らく尚持の軍勢は許斐山城常駐軍勢で、多賀勢を発見して山を降り迎え討ち、尚安は戦の報を受けて急遽態勢を整え「二百計」で遅れて「横合」からの参戦。

傍線部③の如く隆忠は討たれた。討ち果たしたのは吉田彈正忠(重政)で「新撰宗像記考證『宗像郡誌』」に感状がある。

二〇〇九年の春、私は高宮山の麓に住む友人と「多賀美作守隆忠」の墓を探しに出かけた。墓の場所については数十年前に福岡町郷土史研究会が「崖下に転がり落ちていたのを土地の人々の協力を得て山の中腹の元の場所に引き揚げた」と書いた文書の記憶があつた。友人は「子ども頃の見たことがある」と案内してくれて、竹林・樹木を分けてそれらしき場所を探したが見つからず、とうとう一一〇畝程の山頂迄上り詰め

てしまった。合戦の時代、出城があつた山頂は、小学生の頃一畝程の長方形の広場で、お昼を知らせるサインレンが設置されていたが、今は人の背丈ほどの藪と化していた。そこで再度六月に、今度は墓の近くに畑があつたという土地の古老（八幡在住）に情報を貰って再挑戦した。

高宮山の南西の麓から入って古老の畑（既に荒れ果てていた）を通って、一〇畝程上った竹林の中によつと写真の如く美作守隆忠の墓を発見

あるが、許斐山城の主だった隆忠の身分からして出城を守ったとは考えにくい。むしろ許斐山城の主だったこともある武将であれば「哇町河原」に近い場所であるに相応しい場所として、出城もあつた高宮山麓を選定したのではなからうか。

隆忠の部下の侍達の墓については、かつて哇町住民の墓地があつた氏神様（八幡宮兼神興宮）西隣りの丘陵の西端に「四基の石墓があつた」と証言する古老がいる。私は言われ



馬塚

かい合わせにあった鍛冶屋の古老が世話をしていたが、死去して久しく、現在参る人は稀である。さて「合戦に纏わる」伝承である。「合戦に纏わる」と書いたが、実はこの伝承がそういう性質のものとは私は勿論唯今の

の畦町住民は知らなかった。「畦町の歴史」を調べて初めてそうと知った次第である。伝承は三つで

- ①「畦町を流れる西郷川の大明神橋から泉橋の間には火の玉が出る」
- ②「貴船様の木や竹を伐ると祟りがある、又前の大石の上に物を置くと体が悪くなる」
- ③「下がり藤を通っていると馬の首が下がつて来る」

次に戦死した軍馬に関してだが、これは「馬塚」として葬られた。今日の畦町入り口信号から数十軒畦町宿側に入った民家の横手である。道路右側に高さ数尺のこんもりした塚があつて形の良い榎木が植わっているので容易に確認出来る。取り付けられた階段から上ると榎木の根元に小さな祠が祀られている。以前は向

というもの。「畦町河原の合戦」は半日以上及び、雌雄が決したのは畦町河原。多賀美作守隆忠勢と占部尚持勢が拮抗している処に、横合いから占部尚安率いる二百の新手が攻め入ったが為である。隆忠は討ち取られ、軍勢は敗走し宗像勢はこれを

に掲載した小文を紹介して今拙文の終わりとする。

「下がり藤」

故郷は旧唐津街道畦町宿である。西構え口を出ると「下がり藤」と呼ぶ坂道があつて、小学生の頃ここを毎日往復していた。「馬の首がぶら下がつて来るぞ」と聞かされていたので、片側に鬱蒼とした竹林、反対側は崖の坂道は日が暮れると恐く、息を切らせて走り抜け、時には下駄を飛ばしたり転んだりもした。

最近畦町宿の歴史を調べると、室町時代末期「畦町河原の合戦」という戦があつて、死んだ馬を葬った「馬塚」が「下がり藤」の外れにあることを知った。多くの侍や馬が河原に屍を晒し、流れを血で染める有様を目撃した村人の恐怖と鎮魂の実体験は、凡そ六百年を経て「馬の首がぶら下がる」という伝承に変化し、小学生の私を日暮に走らせたのである。

*参考文献

- ・福間町史資料編一・同明治編
- ・宗像郡誌中編
- ・占部家系傳（占部 昇編集）